

# 注染の手ぬぐい

戸田屋商店代表取締役・小林賢滋さん

## 木綿と注染が織りなす和の魅力

昔ながらの技法でさまざまな図柄を染め抜いた手ぬぐいを商う戸田屋商店。  
江戸の粋を現代に伝える手ぬぐいが今、若い人や外国人に人気を広げている。

### 手ぬぐいにアートを 見いだす人たち

手ぬぐいをつねに持ち歩いているのは、嘸家くらいだろうと思っていた。ところが今、若い女性の中には、弁当を包んだり、バッグのカバーにしたりして、手ぬぐいを使う女性が増えているのだそうだ。しゃれた色柄の手ぬぐいをスカーフ代わりに首に巻くのがクールなのだとか。手ぬぐいにアートを見だし、インテリアのように飾って楽しむ人もいます。都心にある某高級旅館でも、宿泊客が寛ぐための部屋に手ぬぐいを飾っていると聞いた。

「私も手ぬぐいを使うのは高齢者が中心だと思っていましたが、ずいぶん前から仕事を持っている若い女性の間で手ぬぐいを使う人が増えているそうです。特に東日本大震災の後は、日本の伝統的なものが見直される傾向が強まり、手ぬぐいをいろいろな用途でお求めになる方が多くなりました」

東京・日本橋に店を構える戸田屋商店の小林賢滋社長が言う。小林さん自身、いつもポケットにはハンカチ代わりに手ぬぐいを入れている。

「手を拭いたり汗を拭いたり、手ぬぐいはどんなシーンにもいいんですよ。木綿は吸水性がいいし乾きも早い。これで風呂にも行けます」

戸田屋商店は1872(明治5)年に日本橋で創業。もともとは木綿金巾(木綿織物)の間屋だったが、その後、ゆかたの製造卸もするようになった。今や、ゆかた・手ぬぐいの老舗である。小林さんはその6代目だ。

かつて手ぬぐいはゆかたの“おまけ”のような扱いだった。商店や役者が客に配るためにまとめて注文することはあったが、手ぬぐいだけで商売になることはめったになかった。今は雑貨店などでも手ぬぐいを扱っているが、少し前までは呉服店や呉服売り場の片隅にほんの少し置いていた程度だった。

「昔は反物をゆかたに仕立て、着古したらそれを切って手ぬぐいとして

使い、そのあとはおむつに使い、ボロボロになったら生地を裂いてハタキにして使ったものです。わざわざ買うようなものではありませんでした」

### 表も裏も鮮やかに染めて

デザインはすべてオリジナルというのが戸田屋商店の心意気。もちろん昔からある市松模様などの手ぬぐいも大事にしているが、春夏秋冬折々の季節に合わせた柄や縁起物、歌舞伎、浮世絵、植物、動物など多種多様なモチーフのデザインもつくっている。中には東京駅丸の内駅舎やチョコレート、トルコランプといったユニークな絵柄のものも。

「昔は紺と白の手ぬぐいしかありませんでした。でも、今はバリエーションが豊かです。うちは伝統的な柄も斬新な色合いにするのが得意。先代の5代目がゆかたの型を使い、今までになかった色鮮やかな小紋柄などを手ぬぐいとして売り出しました。



こばやし・けんじ（写真中央）1959年生まれ。高校生の頃から家業の手伝いをし、立教大学卒業後、正式に入社。1997年、6代目当主として代表取締役役に就任。バブル期には「銀行員が毎日のようにマンション建設営業にきましたが、かたくなに断りました」と言う。手ぬぐいマスクをつくったときは社員全員に「売れないのでは」と言われたそうだが、折れずにビジネスチャンスにつなげた。趣味はゴルフ。



(左上) 型紙部屋に保管されている明治時代からの型紙。(左下) 店舗2階の棚には多彩な手ぬぐい。(右上) 染色は、糊付けされた生地に染料を注ぎ入れ、下から吸い取る。(右下) 余分な染料や糊を洗い流す水洗い。

これだけ多くの色や図柄の手ぬぐいを扱うようになったのはたぶん、うちが最初だと思います」

デザインは小林さんも含めて社員全員で考える。もちろん客の要望するデザインで手ぬぐいを詠えることもある。また、最近は大手企業などとコラボレーションすることも増えているという。

戸田屋商店の手ぬぐいのもう一つの大きな特徴は「注染」という技法を使って染めていることだ。明治時代に大阪の堺で生まれたとされる注染は、生地を表裏ともに同じように鮮やかに染めることができる。だから注染のゆかたは、裾がまくれても表地と同じ柄が見えて粋だとされる。手ぬぐいにしても、懐からさっと出して手をぬぐうとき、表裏ともに鮮やかな色柄が人目を引いたりする。

生地の上に型紙をのせ、へらを使って防染糊を均一に伸ばす。糊が置

かれたところは染料が通らないので色につかない仕組みになっている。糊置きされた生地を染台の上に置き、薬缶のような形をした道具で染料を注ぐ。このとき、ほかの色と混ざってはいけないところには防染糊で土手をつくって囲むようにする。また染料を注ぐときには足元のペダルを操作し、空気を利用して下から勢いよく染料を吸い込む。これも注染ならではのつくり方である。染め上がった生地は水洗いして糊を落とし、最後に乾かすのが大まかな工程だ。基本的にはすべて手作業である。

### 使うほどに味が出る

「染物なので、使い込むと落ち着い

たいい色になります。だから『使うほどに味が出る』という人もいます。残念ながら、今は注染の技法を使える染工所が少なくなってしまいましたが、グラデーションをつけて染めたり、これだけ多くの色を染めたりできる技法は、注染以外にはあまりないでしょう」

念のために記せば、戸田屋商店が染色まで行っているわけではない。同社はあくまでも製造卸という立ち位置で、実際に製作に携わるのはそれぞれの工程専門の職人たちだ。つまり、分業制である。

手ぬぐいができるまでの工程を簡単にたどると、まず同社が図柄を決めたら、型彫職人に型紙を発注する。並行して生地を選んで手配し、型紙が出来上がったら生地とともに染工所にそれを渡す。このときに指図書も添える。染工所がそれに従って布を染めて乾燥させたら、反物の形で



染工所では、まず練地といって染料の浸透をよくするために、薬剤を入れた水槽に生地をつける。それを巻取機で丸巻にして、枠に張った型紙を生地にのせ、へらで防染糊を付ける型置き、染色、水洗い、乾燥と続く。

同社に納品する。それを手ぬぐいの大きさに裁断するというのが一連の流れだ。

「うちは版元であり、そうした工程を管理するのが役割です」

同業者の中には、染工所から納品されたものを裁断専門の業者に出すところもあるが、戸田屋商店ではその作業を社内で行っている。缺で1枚1枚切ることによって検品もしているのだ。これは重要な工程で、同社ではたいていの場合、小林さん自身が担当している。

「1日に1000枚くらいは切っていますね。注染はすべて手作業ですから、出来上がりはその日の気温や湿度にも影響されます。図柄や色に合わせて染料の調合も変えますから、一つとして同じものはありません。一期一会の出会い、これもまた注染でつくる手ぬぐいの魅力と言えるでしょうね」

## 日本土産にうってつけ

戸田屋商店には「梨園染」というブランドがある。しかし小林さんは「問屋は表に名前を出すものではない」という考えに徹してきた。2001年にはウェブサイトを開設したが、直営店などは一切出してこなかったし、宣伝もしてこなかった。ところが昨年、コロナ禍で全国的にマスクが不足したとき、社員用に「手ぬぐいマスク」をつくり、店頭にも置いてみた。するとこれが話題になり、大きな反響を呼んだ。

「うちは営業があまり得意ではないのですが、コロナ禍でゆかたも手ぬぐいも売り上げが大幅に減っていま

す。販路を広げるチャンスがあれば広げていきたい、と今は考えています」

今後、期待できそうなのは海外市場だ。現在は外国人観光客がほぼゼロだが、コロナ禍以前は手ぬぐいを何十枚も買っていく外国人観光客が珍しくなかったという。手ぬぐいはかさばらないし軽いので、日本土産にうってつけなのだ。

「欧州には昔からテキスタイルを飾る文化があり、手ぬぐいも人気があります。今も海外からメールで注文が来ることがあり、需要は増えていると感じています。輸出の手続きなどもだんだんわかってきたので、さらにファンを増やしていきたいですね」

ニューヨークやパリの街角を、腰に手ぬぐいをぶら下げた外国人が闊歩する。いつかそんな光景を見ることができたら面白そうだ。